

猿石の周辺(一)

——明日香研究ノートから——

小川 光 暘

一、平田の猿石群

明日香の西部を南北に貫通する現在の国道一六九号線は、古代の「下ッ道」を文字通り踏襲してきたものである。この国道ぞいに、見瀬^{みせ}の丸山古墳と平田の欽明陵古墳がほぼ一キロメートルの間隔でいずれも道の東側に位置している。また、あたかも明日香の西の玄関に巨大な鎮^{しずく}を設置したかの印象をあたえずにはおかない。

これらの古墳についてはしかし、丸山古墳こそが欽明天皇の陵、つまり書紀に伝える檜隈大陵^{ひのくまのおおみさき}であるとの新説が唱えられて専門家の間ではすでに定説となりつつあるとみていいようである。してみると欽明陵古墳の方は一体誰れの陵であったのか、こうした問題も当然提起されてくるわけだが、とりあえずここでは呼び名として、まぎらわしい欽明陵古墳の名をさけ、土地の古称(梅山)をとってこれを梅山古墳とよぶことをまず明記してかけたいと思う。

猿石の周辺(一)

猿石の周辺 (一)

さて、現在の梅山古墳は、深い壕をめぐらし、原生林に近い木立につつまれているから、一見したところ、墳丘の大半を開拓されている丸山古墳にくらべてはるかに尊貴な奥城おくぎの感を呈しているが、墳丘の長さだけを比較してみても、梅山古墳の一四〇メートルは、丸山古墳の三一八メートルの半分以下、つまり面積にして四分の一に満たないことがわかる。そのうえ、梅山古墳が前方後円墳の形態に改修されたのは江戸末期のことで、それ以前は「完全な双円墳⁽²⁾」であったというから、これは天皇陵とみるよりも、それ以外の有力者の陵墓とみた方がよい。生前に自分達のために「雙墓⁽³⁾」を作らせ、それを大陵・小陵おほみさきやう こみさきやうと称したという蘇我蝦夷・入鹿父子の墳墓などは、さしずめ最有力候補と目されてよいのではないかと思う。

この梅山古墳の西南、小道をへだててすぐ目と鼻のさきに金塚とも檜隈墓ともよばれ、吉備姫王きびひめのみかの墓と称されている小さな円墳がある。吉備姫との関係を裏づける確証はないから、それにこだわる必要はないわけだが、念のために記しておくと、吉備姫は欽明天皇の孫娘で、皇極天皇や孝徳天皇の実母である。それにしてはまことにささやかな墓で、現在は敵めしい玉垣やカシの生垣をめぐらし、正面にはミカゲ石の鳥居や砂利を布設した祭壇を設けて保護されているが、そうしたわざとらしい施設がなければ、辺りの風土に融合して、とっくの昔に自然に帰っていたかも知れない。いや、そもそもこの墓所に、猿石とよばれる不思議な石像群が運びこまれていなかったら、ここを訪うひとは絶えていなかったに相違あるまい。

平田の金塚を詣でると、西正面にさきにのべた石の鳥居があり、その背後には数本のカシの木立が小さな森を形作っている。鳥居の両側はコンクリート製の玉垣が左右に拡がってわれわれの視界を半ば閉ざした形になっているが、目をこらしてその内部をうかがうと、鳥居の右と左に二軀ずつ、計四軀の石像の置かれていることが判然とする。

四軀の印象を略記してみると、(A)向かって右の端にあるものは、哄笑ということばを絵にかいたような顔面を大きく表現した奇異な石像。(B)その左は大きく太った猿のような異形像^(図2)。つぎに鳥居の左側に目を向けると、(C)向かって右手の像は大柄なチンパンジーといった感じの怪人^(図1)。(D)一番左端は、頂上部に面長の猿面を刻んだ陽石風の石刻^(図3)。といった具合になる。大きさはA・B・Dが幼児大、Cが等身大で、いずれも地上に腰を下ろした蹲居の姿勢をとり、腕は両手を重ねて腹部をかかえるような具合に交又させ、腕は体に密着させている。すべて裸像で、陰部は半ば地表に埋もれているが、当初はあからさまに露出していたものと思われる。

石材はミカゲ石だが、最初から計画的・人工的に石を切り出して造形したというよりも、むしろ手頃な自然の石塊に手を加えた感じのラフな形態をしている。したがって、彫刻といっても、飛鳥・白鳳時代の仏像彫刻などとはおよそ異質の、もっと土くさくて、原始的な造形であることは明らかだが、かといってハニワとも違って、もっと鈍重で、しかもどこか脂っ濃い大陸的な野性の匂いをただよわせている。

墓域の北側に廻って玉垣の間から石像の側面をのぞくと、正面とはがらりと様相を変化させ、おおらかな顔がにわかに苦行者の相に変わったり、かと思うと肩のふくらみが別の顔面に変相していたりする。多面石なのである。藤貞幹の『好古日録』は元禄発掘以後の猿石を巷間に紹介した最初の記録であるが、これには「一ハ一石三面、一ハ一石四面、一ハ一石三面、一ハ一石三面」とやや誇大に伝えている。顔か文様か定かでない彫刻があるので正鵠を期したいともいえるが、「内三体は背にも一面づゝあつて両面の像なり、又二体は膝の傍にも面貌^{かほ}の如きものあり。これを数れば四軀九面なり。」⁽⁴⁾とする。『大和名所図絵』の説明の方が穩当であろう。

いったい、この奇怪な、異相の石像は何なのか……。

猿石の周辺（一）

もともと、これらの石像は、梅山古墳のほとりに立て並べてあったようで、平安朝の末期までは人目にふれ、人づてにその噂が知られていたらしく『今昔物語集』⁽⁶⁾には、軽寺の南なる欽明天皇の「檜前ノ陵」^{ヒノマエノミヤサカ}のこととして、

「石ノ鬼形共ヲ廻リノ池ノ辺、陵ノ基様ニ立テ、微妙シ。……」

と記す一文がある。だが、何時の頃にか土中に埋没し、元禄十五年（一七〇二）に、もと古墳の壕であったとおぼしき田圃の中から掘り出され、類例のない異形の石像として江戸時代の好事家の間に広く知れわたって色々の書物に録されることになった。『好古日録』には「往年、欽明帝御陵ノ辺ノ田間ヨリ石人四軀ヲ堀出ス。……」とあるのみだが、『山陵回日記』には

「（欽明陵の）南の下段、高さ四五尺許に石もて作れる奇しき人の像四つあり。二つは陰茎を露して咲みたるかた。二つは頭まろくして法師の如く、面は猿に似たれば里人猿石といひ、また『堀出しの山王』ともよぶ。背面にも、側面にも、異様な顔貌ありて、鬼の如く、獣の如きまじたり、（中略）此石らは、元禄十五年十月五日、此陵の辺の池田とよぶ田地より堀出たりしを、此所にすえたるなりとぞ、」

と伝えている。発掘の時期や場所についての記録としてはこれが最も詳細で、発掘後の安置の場所も、もとは梅山古墳の南面であつたらしいことがわかる。『観古集』⁽⁸⁾にも

「大和国檜隈坂合陵 欽明帝ノ南辺ヨリ堀出ス石人四軀、今陵ノ西南隅ニ南面ニ並べ立つ。……」

とあるから、少なくとも現在の位置になかったことは間違いないようだ。

話がやや横道にそれるが、明治初年に至って、猿石を博物館に陳列のためさし出そうという動きがあつて、明治八年に奈良県令が時の内務卿大久保利通にあてて伺書（吉備皇女御墓御柵内に有之候石像博物館え指出度に付伺書）が出さ

れているが、この文面には「当県下高市郡原田村に有之候、古備皇女御墓御柵内に別紙図面の通、異形の石像有之、……」と記されているから、当時はすでに現在の場合にあったことがわかる。またこの際に附された図面が今泉雄作氏の雜記帖『古制徴證』⁽⁷⁾にあるが、それによると四軀の配置も現状と変わらない。してみると、四個の石像は元禄十五年に掘り出されてから、しばらくは梅山古墳の封土附近に安置され、やがて現在の金塚に移されてきたことになる。その移動の時期や事情について述べたものを筆者は寡聞にして知ることを得なかったが、幕末に梅山を天皇陵にふさわしく改修した際に移動したものと推定して大過ないのではないだろうか。

さて、この俗によぶ猿石とは一体何なのか、藤貞幹の『好古日録』は「其形製何ノ意アルコトヲ知ラズ。或云、古昔、石工ノ戯ニ鐫ル所ナラムト、或ハシカラム」と石工の戯作との考えを支持しているがこれは戴けない。いかにこれらの石像はラフな造形であるとはいえ、ミカゲ石という硬い石材を使って、これだけの群像を作るのはさほど容易なわざではない。古代の画工が命ぜられた仕事の合間に猥画の類を描いた例は、古いところでは法隆寺金堂の天井板のごときものにさかのぼる。しかしこの場合も、人目にふれる筈のない部分にひそかにかき残したものだから、猿石の類例として引きあいに出すわけにはいかない。藤貞幹がこれを戯作と解した理由はおそらく、猿石の一種淫猥な風俗を理解しかねてのことであろうが、淫猥だから戯作とする発想もいささか偏狹というべきであろう。

『大和名所図絵』は、「面貌猿の面なりとて、掘出の山王権現さんおうごんげんと称す。是妄談俗説にして信ずるに足らず。」とまづ俗説に一本釘をさした上でいささか穿った見解をのべている。少し長くなるが右に引用してみよう。

「同郡高取山の奥、壺坂寺奥院に、五百羅漢の石像あり。これは其の始め高取山に壘とりでを城ききしとき、高山にて大石運送に人多く死す。故に石壘成就しがたし。数多の石工これを敷き、壺坂の観音に立願し、終に功を成せり。此即

猿石の周辺 (一)

大悲擁護の力とて、其願を満さしめんがため、数百の石工各二体二体を刻造し、巨巖の面に羅漢を彫りたるもあり。然則は此四軀も其時彫造せしもの必せり。但背の方に面貌あるは、初て造りかけしを指し置き、石をとりなほし造るといへども、なほその意に叶はざるは、其儘に打ち捨て置きしものならん。能能石像を見るに、半造にして、悉く仏体成就のものにあらず。^(a)

四軀の像は高取山の中腹にある壺坂寺の五百羅漢石の同類で、一つの像に顔が二つも三つもあるのは、石工の試行錯誤の結果であるという着想は面白い。壺坂寺の奥院と称する五百羅漢石と見くらべると、断崖にできた自然の凹凸を利用して五百羅漢像を多面的に彫刻する手法と、自然の石塊に生命を吹き込むように造形する猿石にはたしかに造形の発想と手法の上で連りがあり、そうにみえる。たしかに、高取城は南北朝時代に南朝方の英雄越智氏の居城として天下に知られ、桃山時代には豊臣秀長が本格的に大修築を行なった名城である。一方、五百羅漢の石像も、様式上、室町末期から江戸初期までの作とみていいようであるから、高取城の築城と五百羅漢の造像とは時期的に結びつく可能性がある。ところが、猿石の方は、さきに紹介したように、すでに平安末期の『今昔物語集』に存在が知られていたわけだから年代的に隔絶していることになる。さらにいうならば、『大和名所図絵』には猿石を明らかに「石仏」と記してあって、怪異なる裸像という実体を離れた先入感が働いている。四軀の石像が多面石である理由、それが土中に埋もれていた理由など、一応筋の通った見解ではあったが、残念ながら根本のところで事実の誤認があったわけだ。

最後にいまひとつ、本居宣長が『古事記伝』^(b)に記述している別の解釈を紹介したい。

「其御山の中ほどに石人四つ立り。一は男ノ形にて袴をにかけて陰所を露せり。^{アラハ}一は女ノ形にて左右の手にて左右

の乳を隠し、是も陰處^{ホト}をあらはせり。此二つ共に頭にあやしくめなれぬさまなる物を蒙^{カフ}れり。さて又一は法師に似たる形、一は猿に似たり。四つ皆高さ四尺ばかりあり、あやしき物なり。如何なる由の物にか知がたけれど、若くは鈿女命^{タニメノミコト}のわざをきに倣へる形にて、御陵の御魂を招奉^{マツル}る意はへにやあらむと云へり。」

この一文は、本居宣長が自らの見解をのべたわけでなく、文頭に「荒木田久老云」とことわりをつけて、その意見を伝達する形をとっているが、記・紀の神話に伝えるアメノウズメノミコトのわざ、おぎとの関連をもとめているところは興味深く、間接的ながら宣長の意向と受けとめていい内容がある。

そもそも、アメノウズメが天の岩屋戸の前で「胸乳^{むねちち}をかき出て、裳緒^{もひちち}をホドにおし垂れ」（『古事記』）るという世にもあらわな仕種で天照大神をさそい出す。これが「鈿女命のわざをぎ」の内容なのであるが、それは太陽の力の最も弱まる冬至の頃、太陽霊の復活をうながす目的で行なわれた民俗行事に由来する神話と解されている。性的な仕種が霊の復活に結びつくのは、もともとその行為が生命の生成の源であるからで、類似の行為が類似の現象を招くと信じる模倣呪術の原理にもとづくものであるから、これに類した儀礼は古代世界に広く類例が認められる。そうした靈魂の死と再生をめぐる古代世界の生死観をふまえてかみしめてみると、この一見思いつきじみた一文の中に、古代人の心の深淵をのぞくひとつの視角が示唆されていることがわかってくる。

さらにいうならば、Aとして紹介した「哄笑の石像」についても、アメノウズメのわざおぎをみて「高天の原動^{たかまのはらどう}みて、八百万の神ともに咲^{わさ}ひき」（『古事記』）とある一節が思い合わされる。この話は、松村武雄氏が数多い例証にもとづいて、古代世界に広く分布していた「笑い祭」の痕跡を示すものとされている。⁽⁹⁾「笑い祭」とは、笑いには、自然もしくは自然を掌る神の気分をほぐし、活力の痿えをいやすことによって、生成の作用を更新させる呪力があると信

猿石の周辺 (一)

ずる古代人の思想にもとづく祭儀であつて、ギリシア神話における大地と豊穡の女神デメテルにまつわる滑稽譚をはじめ、世界各地にこれに類した行事がのこっている。(蛇足だが、四月一日のエープリル・フールもそのなごりであるという。)しかも多くの場合、巫女が陰所を露出する淫猥なしぐさによって「笑い」がうながされるのであつて、「鈿女命のわざをぎ」と関連の深い点も見逃しえない。

また、石像中に陽物を露出した猿の如き形姿があることも、天孫降臨の神話の中でアメノウズメの相手役を演ずるサルダヒコを思い出させるものである。『日本書紀』⁽⁴⁾によると、降臨するニギノミコトの一行を待ちうけていたサルダヒコの形相は、はなはだ異様であつたというが、口元がてかてかと照り、眼が大きくギラギラと輝いていたという描写には石像Cの相貌を連想させるものがあるし、また猿石の露出する陽物は、神話に鼻高(「鼻の高さ七咫」)という表現によって暗示される内容と結びつく要素がある。

松村武雄氏はまた、アメノウズメを祖とする猿女を戯女^{ざれめ}、サルダヒコの猿田を戯人^{ざるど}の転訛であると解し、ともに「戯れた振舞をする者」ひいては「戯優技を特色とする司霊者」⁽⁴⁾の意味をもつと解しておられる。これもはなはだ傾聴すべき解釈で、アメノウズメとサルダヒコとは、一つにはセックスゴッドとして万物の生成に直接的に関与する性格をもつと同時に、他方では猥雑な戯優技^{ざれわざ}をもつて哄笑を巻き起こし、笑いの呪力によって霊の復活をうながす司祭者でもあつたとする私見の支えをなすものである。

以上、猿石とは何か、という設問に対する既応の諸説を紹介しながら、間接的に筆者の意見を織り込んできたわけだが、この辺で猿石そのものについての私見を中間的に総括しておきたい。

第一に考慮すべきことは、猿石と梅山古墳との繋りである。上述のごとく、『大和名所図絵』はこの両者を年代的

に全く別のものと考えており、『古事記伝』の方では語調より察するに両者を一具のものとしてとらえている。この点、私は、猿石をもつて梅山古墳に附属したもので、作期も古墳築造の当時のものと考えている。その理由としてはまず、猿石群の造形形式が白鳳初期の作である明日香村石神出土の石人像（道祖神石とも男女抱合像とも称される）に近似していること、したがって考古学上、同じく飛鳥・白鳳期に比定しうる梅山古墳と年代的に一致する蓋然性が高いことをあげねばならない。ただし、これらの石像遺物の様式年代の設定は、はなはだ重要な問題であるからさらに後述することにした。つぎに元禄十五年の発掘の場所は少なくとも梅山古墳の周辺施設内と考えられることである。（発掘後の安置の場所も、常識的に考えておそらくは発掘の現場とさほど離れた所とは思われないから、それはむしろ主墳の麓にあつたかも知れない。）してみると、これらの石像はアメノウズメ・サルダヒコに代表される「戯優技」的祭祀儀礼を形象化したものであり、その目的は墳墓の被葬者を対象とした霊の復活、もしくは魂の覚醒強化をうながす呪術行為、つまりミタマフリの思想を造形化し視覚化したものとも解されてくる。

ただし、私は猿石像と神話や神事を直線的に結びつけて、そこに日本固有の信仰や祭儀の直接的造形化をみようとすることはできない。さきにも述べたように、猿石の造形性にはもつと大陸的な匂いが纏綿している。そこに、飛鳥時代という外来思想の強い洗礼をうけた時代背景と、しかもその上に檜隈の里という帰化人と深い繋りのある土地柄とが密接にからんでいるように思われてならない。したがって、この問題は単に猿石と梅山古墳を追うのみでは不十分である。

江戸時代にあれほどさわがれた猿石が、明治以後にはほとんど顧みられなくなった。猿石について正面から論議したものほとんど無に等しい。はなやかに飛鳥・白鳳の仏教美術がもてはやされる中で、いつしか歴史の主流からみ

猿石の周辺 (一)

はなされ、片隅におき忘れられた形になっている。だがこれまでの歴史家は、あまりにも仏教文化の大きさに眩惑されすぎていたのではなかったろうか。飛鳥文化といえはすぐ仏教文化という公式に、はたして間違いはなかったらうか。明日香の地には、そうした反省をわれわれによびかける遺物がほかにもいくつに残っている。猿石とは一体何なのか、本稿で何遍も唱えてきた問題を考えるために、明日香にのこる他の石造遺物にも注意をそそぎ、同時に飛鳥文化そのものについて再考を加えていくことにしたいと思う。

(未完)

- 註(1) 森浩一氏編『古墳時代の考古学』同氏著『古墳』参照。
- (2) 森浩一氏編、前掲書、九七頁。
- (3) 『日本書紀』卷第二十四。
- (4) 『大和名所図絵』卷五。
- (5) 『今昔物語集』卷第三十一(三十五話)。
- (6) 『観古集』第十二冊。
- (7) 清野謙次氏『日本考古学・人類学史』(下)第五篇参照。
- (8) 『大和名所図絵』卷五。
- (9) 『古事記伝』四十四。
- (10) 松村武雄氏『日本神話の研究』第三卷。
- (11) 『日本書紀』卷第二(神話下第九段一書第一)。
- (12) 松村武雄氏、前掲書、五五三頁。